ハッピーエンドの条件は？

Calno

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ハッピーエンドの条件は？

【Ｎコード】
Ｎ７６１０Ｌ

【作者名】
Ｃａｌｎｏ

【あらすじ】
幼い頃から病弱で長い闘病生活の末、ついに命を落としてしまった主人公。
ＮＡＲＵＴＯの世界に転生した彼が、ハッピーエンドを目指すべく奮闘するお話です。
オリ主最強チート系、原作キャラ性格改変、ＴＳ要素あり（ナルトが女性）、オリ設定あり、ありがちなご都合主義満載物語なので、そういうのがダメな人にはお勧めできません。

プロローグ

――――気がついたら幼児になっていた。

これ以外に表現しようのない状況に、俺はいた。

俺が知る「俺」という人間は、もう２０年近くも前に幼児と呼ばれる時代は終わった筈だった。

幼い頃から病弱で、十数年も入退院を繰り返した末にベッドから出られなくなり、病状が悪化した半年ほど前からは、調子が良い時でも起きていられるのは１日の中でせいぜい数時間。

一度寝て起きると数日が経っていることもざらにあるような、死期が目前に迫っているという表現がよく当てはまる、そんな人間だった。

思い出せる最後の記憶も、既にまともな思考すら出来ない朦朧とした意識の渦の中を漂っているだけのもの。

なのに、俺は今、確かに目を覚ましていた。

頭痛の伴わない目覚めに、言いようのない嬉しさがこみ上げてくる。

こんなに快適な目覚めはいつ以来だろう？

ひとしきり喜んだ後、ふと冷静になり、嬉しさに押しやられていた違和感が気になってきた。

ここはいつもの病室のベッドではなく、体にいつも纏わり付いていた点滴や人工呼吸器も見当たらない。

周りの物が大きく感じるし、それとは逆にやけに自分が小さい気がするのだ。

いつもの倦怠感とは違う種類の体の動かしにくさも感じる。

違和感の正体を確かめるべく、色々と考えたり試したりした結果、どうやら俺は幼児になってしまったらしい、という結論に至ったものの、何故こんな事になっているのかがさっぱり分からない。

記憶の追体験という感じでもないので走馬灯とは思えないし、こんな現実感のある夢なんて今まで見た事がない。

もしや俺は既に死んでいて、これは輪廻転生というやつなんだろうか。

そうだとしたら何故以前の記憶が残っているんだろう？

などと、混乱した頭で散々思い悩んだ挙句に、結局答えを出す事を諦めた。

なんにしろ、ただ死ぬのを待つだけだった状況が好転した事は間違いない。むしろこれは喜ぶべき事態じゃないか。

そう結論付けると少し気分が落ち着き、周囲の状況を確かめる余裕が出てきた。

周りには自分と同じ様な歳の子が他に5～6人いて、俺を含むその子達の面倒を見てくれているらしい10歳くらいの女の子が2人。

周囲にある文字は日本語で書いてあるので、どうやらここは日本らしい。

しかし、貼ってあるカレンダーの年号が平成ではなく、まったく見覚えのない年号が書かれている。

果たしてここは未来の日本なのか、はたまた日本に良く似た異世界なのか。

しばらく女の子達の会話から情報収集をしていると、ここはどうも孤児院のような場所であるらしい事、俺はジンという名前で呼ばれてる事などがわかった。

二人の会話は年相応の内容で、皆が皆前世の記憶を持ってる世界というわけではなさそうだった。

同じ境遇の人間が他にいない可能性を考えると、俺の素性は隠す事べきだろう。

神童と祭り上げられてしまい自由が制限されるくらいならまだしも、最悪の場合化け物扱いやモルモットにされるなんて事まで考えられる。

ここは俺がかつて住んでいた、人権の保障されていた日本と同じだとは限らないのだ。

考えすぎかもしれないが、孤児という後ろ盾もなにもない今の立場を考えると、慎重すぎるくらいの方で丁度いいに違いない。

そんな事を考えている間に、彼女達の話題はここでの生活の話から、通っている学校での話へと移っていた。

新しく始まる授業が楽しみだとか、クラスのカッコいい男の子についてだとか、これまた年相応の話題だったのだが、俺はその話を聞いている最中、言葉では言い表せない程の衝撃を受けた。

彼女達の話の内容を要約すると、

曰く、「新しく習う変化の術の授業が楽しみ」

曰く、「カッコいい男の子であるイタチ君は、7歳にして今年中にアカデミーを卒業してしまうかもしれない」

曰く、「歴史の授業に火影様が来ていたが、あの人が昔凄い忍者だったとは信じられない」

変化の術？イタチ？火影？忍者？単語の意味は分かる筈なのに、理解が追いつかない。

冷静になるまでに時間が掛かったが、冷えた頭がようやく働き始めた。

どうやら、信じ難い事にここは－ＮＡＲＵＴＯ－の世界らしい。

病弱な人間の多分に漏れず、小説や漫画を読む趣味を持っていた俺にとって、ＮＡＲＵＴＯは大好きな漫画の一つだった。

サスケとナルトのすれ違いにやきもきし、白や再不斬、アスマ先生の死に泣き、自来也と三代目火影の生き様に心を打たれた。

完結を見ることなくこの世界に来てしまったのは少し心残りだったが、未来を知っているも同然の今ならば、漫画では死ぬことになる人を助ける事や、サスケとナルトが一緒にうちはマダラに立ち向かうなんていう未来が見れるかもしれない。

今後の事について思いを馳せていると、強烈な眠気が襲ってきた。

目が覚めたら病院のベッドに逆戻り。なんてことがありませんように。

心の中でそう祈りつつ、俺は意識を手放した。

プロローグ（後書き）

というわけでプロローグです。
初投稿なので見苦しい点も多々あると思いますが、よろしくお願いします。

第一話

あれから約3年半、俺こと狭間ジンは5歳になっていた。

同年代に比べると少し高い身長と、短めの黒髪の大半を目に掛からぬようにと後ろに流した外見は、幼い頃の父親とそっくりらしい。

既に亡き俺の父親は、かつてうちは一族と共に木の葉の里を興した千手一族の分家筋に当たるらしく、この狭間という苗字は、分家として新しい家を興す際に初代火影である千手柱間の名にちなんで付けられたものだという。

両親はともに優秀な忍びであったというが、優秀であったが故に5年前の九尾事件で前線に立って奮闘し、当時1歳に満たなかった俺を置いて帰らぬ人となってしまったらしい。

一度会ってみたかったなと思うも、こればっかりは仕方ない。

俺がこの3年半の間何をしていたかというと、ひたすらに己を鍛え続けていた。

優秀な忍者になりたい。ナルトを支えてやりたい。サスケに幸せになって欲しい。白や再不斬を死なせたくない。やりたい事なんて山ほどある。

そのどれを叶えるにも力は必要だった。

頑張れば出来ない事なんてない。なんて言えるほどの楽天家なわけじゃない。

だけど、未来を知っているというアドバンテージを上手く活かす事が出来れば、全てが上手くいく可能性もきっとある筈だ。

前世では努力する事さえ許されなかった俺にとって、目標の為にやる努力は、楽しかった。

幸いにも俺は才能に恵まれたらしく、今のところ体術、チャクラ共に異常と言ってもいい程の伸びを見せている。

千手一族の血のお陰なんだろう。両親には感謝してもしきれない。

しかし、必要以上に目立つと動きにくくなるし、貴重な千手一族として大蛇丸の転生先候補にされる危険性もある。

素性とともに力も隠し続けるべきだろうと思い、修行は人目を忍んで行っていた。

素性に関しては今のところバレる心配はなさそうだ。

喋れるようになってしばらくは、バレてしまわないかと戦々恐々としていたのだけど、結局それは杞憂だった。

何故なら、実は俺は演劇の才能にも恵まれており、完璧な演技をい

とも容易く行うことが出来たから・・・なんていうありえない理由ではなく、この世界には年齢より大人っぽい子供がそんなに珍しくなかったのと、孤児という境遇上、多少大人びていたところで大して不自然に思われなかったのがその理由だ。

この世界ほんと大人っぽいやつ多いもんなぁ。イタチ君とか。

「将来有望かもしれない大人びた子供」という程度の評価で片付けられた俺は、今ではほとんど素の状態で過ごしている。

5歳になって半年ほど経ったある日、世話になっている孤児院の院長から大事な話があると呼び出された。

院長は部屋に入ってきた俺にお茶を勧めてから、ゆっくりとした口調で切り出した。

「院を出てみる気は、ありませんか？」と。

「両親の残してくれた家に戻ろうと思います。今までお世話になりました」

俺はその提案に頷き、感謝の意を込めて頭を下げた。

兄弟同然に育った友達や、懐いてくれているチビ達、お世話になった院長と離れるのは寂しいけれど、これが今生の別れというわけでもない。

苦労も増えるだろうけど、一人の時間が増えれば修行の量を増やせ

るという利点もあるし、目標の事を考えるなら自立は早ければ早い方が良いとも言える。

優秀な忍者だったという両親が残してくれた財産は、贅沢三昧とまではいかないものの、子供一人が普通に暮らす分には十分過ぎる額だ。

「本来、あなたの様な年の子に言うべき台詞ではないのは分かっています。本当に申し訳ありません。・・・ただ、これだけは分かって欲しいのです。決して私はあなたを疎んじたわけではないという事を」

院長は辛そうに言った。

「分かってますよ、そんな事。何年ここにいたと思ってるんですか。チビ達の事、よろしくお願いします。たまに顔を見に来ますから」

そう、そんな事は言われずとも分かっている。この人がどんなに優しい人なのかも。

九尾事件で増えた孤児は親戚などに身を寄せた者もいるにはいたが、俺と同じ境遇に置かれた子供も数多く居た。

その上、事件で大打撃を受けた里は完全に立ち直ってるとは言い難く、事件から4年以上経った今でもこの孤児院から巣立っていく子よりも入ってくる子の方が多いのが現状だ。

一番人数の多い俺達の世代が大きくなるにつれ負担が大きくなるのは必然で、両親が残してくれた家がある俺に早めに自立して欲しいというのは自然な流れだった。

「あなたが賢い子なのはよく知っています。ですが、くれぐれも無理はしないでください。困った事があればいつでも頼って来ていいんですよ。必ず私がなんとかしてみせますから」

院長はようやく表情を少し緩め、そう言ってくれた。

余裕なんてある筈がないのに、俺を気遣ってくれる、院長の優しさが嬉しかった。

「ありがとうございます。院長こそ無理しないでくださいね。俺はきっと立派な忍者になりますから。そうなったら寄付金一杯出しますよ、期待しててください」

本心からの言葉だったが、最後の方は冗談めかして言って、ではこれで失礼します。と再び頭を下げてから俺は部屋を出た。

共同部屋に置いてあった少ない私物をまとめ、別れの挨拶をして周ると、皆が別れを惜しんでくれた。

俺は寂しさと暖かさの両方を感じながら、院を後にしたのだった。

第二話

・・・この家を見る度にいつも思うんだけど、いくらなんでも大きすぎるよな。

俺は狭間家の門を前にして心の中で呟いた。

両親の残してくれた財産から考えると、分不相応なくらい大きく思えるこの家は、恐らく初代火影が得意としていた木遁忍術で建ててくれた物なんだろう。

これまでこの家は俺が自立するまでという条件で、三代目火影が管理してくれていた。

俺は、本来の持ち主だからという事で鍵を一本持っていて、自由に出入りする事が出来る。

去年初めてここに訪れた時から、俺は暇を見つけてはここに入り浸るという生活を続けていた。

主な目的は修行なのだが、世間に対する建前的には、両親の面影を追い求め、かつての家に入り浸る寂しがりや子供、という設定である。

俺にとっては既に馴染みの深い、勝手知ったる我が家だ。

この家は凄い。

それは大きさだけの話ではない。

なんと、この家の蔵には一族のチャクラに反応すると幻術が解けて現れる、地下へ続く隠し扉なんていうものがあるのだ。

果たして三代目は、この扉の存在を知っているのだろうか？

初代火影の孫だという綱手姫なら知っているのかもしれない。

一族以外の進入を許さないという強固な結界が貼られた扉の先には、大量の書物が収められた書庫と、様々な忍具や薬草が収められた保管庫。さらには、秘密裏に秘術の訓練をする為であろう広い演習場までもがあり、人目を避けて修行のしたい俺には最高の場所だった。

初めてここに足を踏み入れた時の事を思い出す。

流石は音に聞こえた千手一族だ。写輪眼なんて反則的な眼を持つうちは一族との争いを制したのは伊達じゃない、と先達の偉大さに感動したものだった。

うちは一族にも、写輪眼でしか読む事の出来ないという特殊な石版が設置されている秘密集会場があるらしい。

多分ここも、それと似た目的で作られた一族の秘中の秘を後世に伝える為に作られた施設なのだろう。

本家ではなくうちの敷地にあるのは謎だが、例えば千手一族の秘術を狙う敵の目を欺く為だとか、きっとなにかしらの理由があるに違いないと、深く考えずに納得しておく事にした。

書庫の蔵書の中には、影分身を始めとした千手一族に伝わる禁術が書いてある忍術書や忍薬の研究資料など貴重な物が数多くあり、千手一族の多くが得意としたと言われる水遁と土遁に関する書物は特に素晴らしかった。

しかし、中には「実践！家事が楽になる実用忍術ベスト５０」とか「あなたにも出来る！里をまとめる１００の方法　著　千手柱間」とか「一月で受かる！千手式中忍試験対策術」などという、かなりアレなタイトル群をもあって、それらを見つけてしまった時は、ですよねー。奇人変人の巣窟である木の葉の里のトップを勤めた一族がまともなわけないですよねー。と

落胆したような、妙に納得したような、なんて表現したらいいのかわからない複雑な気分になった。

まぁ考えてみれば、真面目な時はあれだけカッコいいカカシ先生だって普段はかなりアレな人だし、一番の常識人っぽい三代目ですらおいろけの術に掛かってナルトに禁術が載ってる巻物盗まれたりする様な人だ。

伝説の三忍なんて、覗き常習犯の官能小説家、博打狂いの伝説のカモ、マッドな禁術オタクのオカマ、と変人の極みと言っていい人達

である。

良いか悪いかは別として、木の葉の忍ってのはきっとそういうものなんだろう、と納得はした。

納得はしたが・・・、漫画で読んだ初代火影のカッコよさとか、うちは一族と渡り合った千手一族に対する憧れとかが、一気に台無しになってしまったようなガッカリ感があった。

この分だと、俺の両親も同類かもしれない。

三代目達に機会があれば尋ねてみよう、と思っていた両親の話を聞くのがちょっと怖くなった俺だった。

・・・閑話休題。

家の中に入り荷物の整理をして一息ついた俺は、当面の予定を立てる事にした。

修行はこれまで通り、何をするにも便利な影分身の数と質を上げる為に、チャクラの量を増やすのを優先する方針でいくとして、まずはナルトに関する情報を集めたい。

今までも孤児院での買出しのついでになんかに時折情報収集の真似事をしてみたものの、原作同様に九尾事件が里人の心に深く根付いてしまっている事が実感出来たくらいで、未だに本人は見掛けた事

すらなかった。

しかも、ナルトに対する里人の反応は俺が予想していた以上に深刻で、

「さっき、金髪の子供を見たんだけど、どこに住んでいる子なのかな？」

と、人の良さそうなおばちゃんにちょっと聞いてみただけで、おばちゃんはあからさまに顔色を変えて

「さぁ、知らないねぇ？金髪の子供は狐が化けているなんて言われてるからね、あまり近寄らない方がいいよ」

なんていう返事が返ってくるような状態だった。

ナルトを見掛けないのは、三代目が九尾の事件の爪跡が街に色濃く残っている間は、出来るだけ人の目に触れさせたくない、と考えているからなのかも知れない。

しかし、来年にはアカデミーに入学するわけだし、物心付いた子供をいつまでも閉じ込めておくわけにもいかないだろう。

今なら以前よりも、ナルトが外に出る機会も増えている筈だ。

確かナルトは、原作が始まった時期には一人暮らしをしていた筈だ

けど、今はどうしているんだろう。

三代目とでも一緒に暮らしているのだろうか？

それとも既に一人暮らし？

いずれにせよ、原作を見るかぎりでは寂しい思いをしているに違いない。

病室で過ごした時間の長い俺にも、一人の寂しさは身に染みている。

子供の頃のあの寂しさと不安な気持ちは、正直思い出したくもない。

そう考えると、居ても立ってもいられなくなってきた。

どのみち、日用品の買出しはしなければならない。今すぐ外に出ることにしよう。

俺は手早く準備を終えて家を出ると、里の中心に向かって歩き出した。

第三話

狭間家に住まいを移してから1月が経ち、季節は初夏を迎えていた。未だナルトが見つからない事を除いては、一人暮らしは上手くいってると思う。

一人暮らしをする際に、一番重要なのは多分家事だ。

里にDランク任務として依頼する、というのも一応考えた。多分院長は、それを前提に一人暮らしを提案したんだと思うし。

でも、一応俺には家事をこなせる能力があって、未来を考えるとお金は節約しておきたい。それに人を雇うにしても、アカデミー卒業まで雇い続けるのは資金的にもちょっと厳しい。

いずれ家事を覚える必要があるのなら、今覚えるのもありだろう。慣れるまでは、修行の時間が削られる事になってしまうが、それは仕方がない事だ。

そんな風に考えていたのだが、この悩みは思いの外あっさりと解決してしまった。

それというのも、大した期待もせずに読んでみた、件の書庫のアレなタイトル群のうちの一冊が、予想に反して「ある意味」本当に使

える本だったのである。

その本のタイトルは「実践！家事が楽になる実用忍術ベスト５０」。

何故「ある意味」なのかというと、案の定というか、なんというか、家事自体は大して楽にならなかったからだ。

それどころか、普通にやるよりも時間が掛かるようになった、と言ってもいい。

なんせ、この本に載ってる忍術のことごとくが、「もう包丁の切れ味に悩まない。風の性質変化を使った砥石要らずの風遁術」などいう

「・・・いや、そんな難しい事するくらいなら、素直に砥石使うから」

と、突っ込みたくなるような、難易度が馬鹿みたいに高い割に、大して役に立たない術だったのである。

しかし、家事での実用性はともかくとして、性質変化のコツなどについて事細かく書いてあり、今や家事は立派な修行の一部になっている。

今は、その本に載っていた忍術の一つを使って、洗濯物を乾かしているところだ。

洗濯のために作られたという「雨でも安心。一瞬で洗濯物から水分を取り出す水遁術」は、この本の忍術の中でも特に凄い術だった。

チャクラの圧縮とコントロールが重要なこの術は、他の術とは別次元の難易度だ。

しかも、この術はチャクラ運用の練習用として有用なだけではなく、家事とは別の方向で、実用的な術でもあった。

この術、洗濯物から水分を～なんて書いてあるが、もし人間に相手に加減をせずに使おうものなら、とんでもない事になるだろう。

ガードなんて一切お構いなしに、手の平で触れた箇所から一瞬で皮膚と血液の水分を奪い尽くす恐ろしい術になるに違いない。

この術は、水遁を構成する要素の大半を占めるという「チャクラを水に変化させる」「水をコントロールする」の二つのうち、「水をコントロールする」部分に特化したものだという。

チャクラを水に性質変化させる必要がない分、コントロールだけに集中する事よって成り立つ術らしい。

ただ、同じ水分のコントロールでも「川の水などの純度の高い水分で構成されたものをコントロールする」と「水分をコントロールする事によって、物質から水を分離させる」では、必要とされるチャクラの密度が段違いだった。

しかもその高密度のチャクラに指向性を与え、効果範囲を上手く調整出来なければ、自分まで被害を受けるはめになる。

術をある程度遠くで発動出来るのなら、コントロールが多少甘くても、自分に被害が及ぶ心配はない。だが、チャクラは体から離れれ

ば離れるほど、高密度を保つのが難しくなってしまう。かと言って、近付け過ぎると今度は、コントロールが少しでも甘ければ自分の手にまで効果範囲が及ぶ。

理想は手の平との隙間をほんの少しだけ開けた状態で、完璧にコントロールすることだろう。

最初は、チャクラの量を出来るだけ抑えた状態で練習を始めた。

洗濯物1枚乾かすのに1時間以上掛かったにも関わらず、終わる頃には手の平は水分が奪われカサカサになってしまっていた。

今は多少ましになったとはいえ、威力を抑えた術を、なんとか維持するだけで精一杯。

もし、今の練度で、実戦で使える威力にしようと思ったら、相手と共に俺の手の平が枯れ落ちるという、壮絶な自爆技にしかならないだろう。

今よりも高い威力で安定させられるようになれば、チャクラの量とコントロールを同時に鍛えられる、効率の良い修行にもなりそうだけど。

今の俺だと、朝は家事でコントロール、夜に影分身でチャクラの量と、別々に鍛えるしかないので、どうしても時間取られてしまう。

アカデミーが始まると中々時間も取れなくなるし、それまでには、影分身と一緒に家事の練習が出来るレベルまで鍛えなくては。

接近戦をしながらこの術を発動させて、なおかつ完璧にコントロールするなんて、一体何年掛かるのやら。つい、溜め息が漏れてしまう俺だった。

一日分の洗濯物を、３時間ほど掛けて乾かし終え、乾いてしまった手の平に軟膏を塗りながらふと思う。

この本って何の目的で、どんな人が書いたんだろう？

これに載ってる術を、事も無げに扱えるくらいに優秀な忍が、また例によってアレな感じの人で、ほんとに家事で楽するために開発した忍術を本にしたんだろうか。

もしくは、書いたのはいたってまともな人で、実は家庭に入った人の為の、家事をしながら力を鍛えるための真面目な教本で、タイトルがアレなのは周りの目を誤魔化すため、という説もあるかもしれない。

著者はほぼ間違いなく千手一族なので、出来れば後者であって欲しい。

しかし、「雨でも安心～」の術のページに「注：この術は危険なので人に向けないようにしましょう」なんていう、冗談なのか本気なのかわからない注意書きがあるあたり、前者の可能性も捨てきれないのが恐ろしいところだ。

ようやく家事が終わり、子供達が外で遊んでいる時間になったので、俺はナルトを探しに外に出た。

この時間はナルトと会う、という大事な目的のための時間だが、それと同時に体を鍛える時間でもある。

チャクラに関しては家事で鍛えているので、次は身体能力というわけだ。

どんな事をしてるのかというと、特殊な重りを仕込んだリストバンドとレッグウォーマーを身に付けてのランニングだ。

特殊な重りというのは、原作でロック・リーが身に付けていたあれと多分同じものだ。

流石にいきなりあの重さは無茶なので、相応の重さのものではあるけど。

子供がランニングウェアを着て、毎日毎日走っている様は、大層異様な光景だろうと思う。

しかし、「忍者になりたいので特訓しているのです」といえば皆が納得してくれる。

なんというか、流石は木の葉の里だ。

この年で筋トレなんかして、体の成長は大丈夫だろうか？とも思わなくもないけど、中忍試験時に成長期真っ只中だったであろうリー君は、その後も立派に成長してたし。

あれを見る限り、この世界の忍の体なら大丈夫だよね。多分。

そう自分を納得させて、とりあえずいつも通りに街へと向かう。

いつものコースである商店街を抜けて、土手を通り、公園に差し掛かろうとしたところで、公園から何組かの親子連れが出てくるのが見えた。

まだ人が引けるような時間じゃないのに珍しいな、と思いながらすれ違い様に会釈する。

そして俺は、公園に入ったところで親子連れが帰っていった理由を知る事となった。

公園の中には、木の葉の里では珍しい、そして、俺がずっと探していた、色鮮やかな金色が在ったのだ。

第四話

――――やっとみつけた

普段より幾分か人の少ない公園。そこのブランコに座っているのは、間違いなく金色の髪を持つ子供――――ナルトだ。

俺は、激しく動悸する胸を落ち着かせようと、公園の入り口でひとまず立ち止まって、様子を伺う。

公園の中には、ナルトの他にも何人か遊んでいる子供達がいた。

先程出て行った大人達の態度から何かを感じ取ってしまったのだろうか、時折チラチラとナルトの方を気にしてはいるものの、やはり直接話しかける子はいない。

頭では理解していた筈のその光景を見て、ナルトに会えた喜びに浮かれきっていた頭が、急速に冷えていくのを感じた。

それでもまだ緊張で少し高鳴る胸を抱えながら、俺はナルトに向かって歩き出した。

少しうつむいて、ブランコを小さく揺らしているナルトは、こちらに気付く様子はない。

初めて間近で見る本物のナルトの姿は、俺がイメージしていた漫画のナルトとは少し違って見えた。

想像よりも小柄な体、ツリ目がちな青い瞳。頬にあるヒゲのような3本線が愛嬌をかもし出している。

短めのくせっ毛はただ遊ばせてあって、漫画でのあの髪型は、目立つために始めたものなのかもしれない、と思った。

なんて声を掛けようか少し悩んだが、結局無難な言葉しか出てこなかった。

「こんにちは」

ナルトは声を掛けられると思ってなかったのか、驚いた様子で、キョロキョロと周りを見渡した後に、不思議そうに俺を見上げた。

「・・・だれ？」

「ダメだよ、挨拶されたらきちんと挨拶で返さなきゃ。はい、もう一回。こんにちは」

「えっと、・・・こんにちは？」

「よく出来ました。俺は狭間ジンって言うんだ。ジンって呼んで。君の名前は？」

その言葉を聞いて、まだ戸惑いが残っていた顔が、天真爛漫という

表現がよく似合う笑顔になった。

「あのね、私ナルト！うずまきナルトっていうの」

「そっか。よろしく、ナルト」

「うんっ。よろしくね、ジン！」

俺は差し出された手を握りながらも、心の中で首を傾げていた。

ナルトは自分の事「私」なんて言ってただろうか？確か「オレ」だったような気がするのだが。

この世界に来て随分経つし、確かにかつての記憶は薄れ始めている。

ＮＡＲＵＴＯの世界に関しての覚えている限りの記憶は、預言書という形の偽装を施して書き留め、地下の演習場の片隅に埋めてあるが、流石にそれぞれの一人称までは書いてなかった。

それに口調もちょっと違う気がする。まるで女の子のようだ。

「あの、ナルトは、男の子・・・だよね？」

嬉しそうに手を握っているナルトに、確認してみる。

「私、女の子だよ？」

何を言ってるのかわからない、というような顔をされてしまった。

・・・俺も何を言われているのかが、わからない。

頭の中で今の言葉を反芻してみる。

私、女の子だよ？

私＝女の子、つまり、ナルトは・・・女の子？

「えっ？」

動揺を悟られないように、外面を必死に取り繕っていたが、つい、内心が声に出てしまう。

「女の子だと、ダメなの？」

さっきまで笑顔だったナルトが、泣きそうな表情になっていた。握っていた手も、いつの間にか解けてしまっている。

一体なにをやっているんだ、馬鹿か俺は。俺がナルトを悲しませてどうする。

「いやいや、そんなことないよ。ちょっと驚いただけ。ごめんね」

自分を殴りつけたくなる衝動を抑えて、早口でまくし立てる。

「ホント？女の子でもいい？」

「もちろん。今日から俺達は友達だ」

俺の言葉に少し驚いたような表情をした後、友達かぁ、と呟きながら、照れたように笑うナルトを見て、ようやくほっとする。

・・・しかし、四代目。師匠からもらった大事な名前なのは重々承知なんですが、女の子の名前にナルトってのはどうなんでしょう。

こっちでは別に普通なのかな？

もしかしたら、名前をもらった時は、女の子が生まれるなんて考えもしなかったのかもしれない。

なんせ四代目は、あの自来也仙人の弟子でカカシ先生の師匠だからな・・・。

少しくらい間が抜けていたとしてもおかしくない気がする。

それにしても、ナルトが女の子か・・・俺の行動が影響して、原作とずれるというのは勿論想定してたけど、こういうずれ方は正直想定外だ。

大筋が漫画と同じなのは間違いないけど、漫画での情報に頼りすぎると、そのうち痛い目を見るかもしれない。気を付けよう。

「じゃあ、何して遊ぼうか？」

まだ照れているのか、あたふたと、ちょっと挙動不審気味にしているナルトに聞いてみる。

「えっとね、えっとね、忍者ゴッコ！」
子供らしい元気一杯な返事が返ってきた。
「忍者ゴッコ？」
「うんっ。私大きくなったら、凄い忍者になるの！それでね、火影の名前を受けつぐんだよ」
夢を語る時のキラキラした純粋な眼差しが眩しい。
こんな境遇にも関わらず、真っ直ぐに育っているナルトは、本当に強い子だと思う。
「そっか。じゃあ、一杯頑張らないといけないね」
「来年になったら、アカデミーってとこにいって、忍者になるための勉強するんだって！」
楽しみだと笑うナルトに、俺も来年からアカデミーに通うんだよ。と伝えると
「ホントに！？ジンは私よりお兄ちゃんなのかと思ってた。でも、一緒は嬉しいな」
ナルトは、本当に嬉しそうにそう言った。
「俺も嬉しいよ。じゃあ、忍者ゴッコやろっか」
忍者ゴッコを始めても、残念ながら他の子達が交ざってくるような

事はなかったが、それでもナルトはとても楽しそうにしていた。

こうして、俺とナルトは友達になったのだった。

第五話

ナルトと友達になったその日の帰り道、俺は薄暗くなった夕暮れの道を、ナルトを背負いながら歩いていた。

この短時間ですっかり打ち解けたナルトは、「ジンって力持ちだねー」と俺の背中の上で大層ご満悦である。

あれからしばらくの間、忍者ゴッコを続けていた俺達だったが、その最中、はしゃぎ過ぎたナルトが足を捻ってしまったのだ。

「こんなの全然痛くない！」そう強がっていたナルトだったが、痛めた足に体重を掛けないようゆっくりと歩いていて、明らかに無理をしているようだった。

俺はナルトを家に帰そうとしたが、「足は大丈夫だから帰りたくない」と駄々を捏ねられてしまった。

「もうすぐ暗くなるから、今日はもう帰ろう」と説得を試みると、今度は一転して、「やっぱり足が痛いから帰れない」という。

子供らしい我侭な、しかし微笑ましい言葉に、つい苦笑が漏れてしまった。

ナルトが帰りたくないという気持ちは分かるし、中々他人に甘える機会がないであろうナルトの我侭を、出来れば聞いてやりたいとも思う。

けれど、いつまでも公園に居座るわけにもいかなかった。
しばらく押し問答をした末に、俺がナルトをおぶって家まで送るという条件で、ようやくナルトは納得してくれた。
小柄とは言っても、俺と体の大きさがほとんど変わらないナルトを背負いながら歩くのは、身に付けている重りの重さも相まって、流石に少し辛かった。
にも関わらず、背中で大喜びしているナルトを見ると、大した苦労ではないような気持ちになるのだから、我ながら現金なものだと思った。

公園から出て、土手を歩いている途中、上機嫌で今日の忍者ゴッコの感想を語っていたナルトが、急に静かになった。
散々はしゃいでいたから、流石に疲れたんだろうなと、しばらくの間、無言で歩いていると
「あのね」
ナルトとは思えないほど、静かな調子で、背中から声が掛けられた。
「うん？どうした、ナルト」
どうやら、話したい事があるらしい。

「私ね、お父さんもお母さんもいないの」

ポツリ、ポツリ、と少し震えてるようにも聞こえる声で、ナルトは話し始める。

「おじいちゃんみたいな人はいるけど、いつも忙しそうにお仕事してて」

声から伝わってくる感情に、少し、昔を思い出した。

「外で遊んでても、誰も迎えに来てくれなくて」

消灯時間が過ぎた後の、誰もいない病室の寂寥感。

「一人で帰らなくちゃいけない、帰り道が嫌で」

あの時は、まるで世界に住んでいるのが、俺一人になってしまったかのようだった。

「おんぶとか肩車とかしてもらってる子を見て、いいなーって思ってて」

その寂しさを誰かに分かって欲しくて、でも誰にも言えなくて、ただ時間が早く過ぎる事だけを願っていた、子供の頃の思い出。

「・・・だからね」

———だから、今日はありがとう。

ナルトの話はそう締めくくられ、再び沈黙が訪れる。

「・・・俺も、同じだよ」

「え？」

「俺も、同じなんだ。父さんも、母さんも、いない。今は一人で暮らしてる」

俺の言葉を聞いて、背中でナルトが息を呑んだのが、ハッキリと分かった。

・・・こういう言い方が、卑怯なのは、わかっていた。

俺は一人で暮らしているとはいっても、孤児院に行けば、一緒に育った友達も、親代わりをしてくれていた院長先生も居る。

前世を合わせれば、自立すべき年齢を過ぎている俺と、今のナルトは、本当の意味で同じではないのも理解していた。

嘘を言っているわけじゃない。でも、これは、嘘も同然の言葉だった。

・・・でも、それでも、俺はナルトに言ってやりたかった。

俺も同じなんだ。だから、その気持ち分かるよ、と。

寂しかっただろ、辛かっただろ、一人でよく頑張ったな、そんな意味を込めた言葉を、言ってやりたかった。

昔の俺が欲しがっていた言葉を、今のナルトも欲しがっているように思えたから。

「ナルトと一緒に遊べて、ナルトと一緒に帰れて、俺も嬉しいよ」

これは、掛け値なしの本心だ。

その言葉を聞いた途端、俺にしがみついているナルトの腕に力がこもり、ナルトは俺の後ろ髪に顔を埋めた。

小さく、鼻をすするような音も聞こえてくる。もしかしたら、泣いてしまっているのかも知れない。

少しの間、そうしていたナルトだったが、再び顔を上げた時には、遊んでいた時と同じ、本来の明るいナルトに戻っていた。

その後は、やはり三代目火影の事だった、ナルトのおじいちゃんみたいな人についての話になり、「おじいちゃんは火影の名を受け継いでいて、里の皆に認められてる凄い人なんだよ！」などと、自分の事のように得意気に話すナルトの言葉を、微笑ましく思いながら聞いていると、程なくしてナルトの家に着いた。

ナルトの家の商店街の近くにあるアパートの一室だった。

その玄関を前にしてナルトを背中からそっと降ろす。

だが、ナルトは中々家に入ろうとしなかった。
俺に帰って欲しくないのだろう、話題を探しては、家に入るのを引き伸ばそうとしている。
もう初夏とはいえ、夜になると外はまだ冷える。
「もうちょっとなら一緒に居れるから、中に入ろう。このままじゃ、風邪引いちゃうよ」
そう言って中に入るよう促すと、
「なんだか、ジンって、お兄ちゃんみたいだね！」
ナルトは唐突にそう言った。
いきなりだな、と思いながら、まあ、ほんとなら、年が年だからねと、内心で呟く。
「優しいし、おんぶしてくれるし、ジンと一緒にいるとね、思うの」
「お兄ちゃんってこんな感じかなぁ・・・、って」
今日会ったばかりなのに、おかしいかな？と、嬉しそうだった表情が一転、ちょっと不安そうな表情になって、こちらを窺いながら言う。
「俺もそう思うよ。妹が居たらこんな感じかなって」

むしろ父親の方が近いのでは？いやいや、まだ兄でいける筈だ。などどいう、心底どうでもいい葛藤を抱えながらも、俺はナルトを安心させるように、笑顔でそう言った。

「ホントッ！？じゃあさっ、じゃあさっ、ジンの事、ジン兄って呼んでもいい？」

勢い込んで言うナルトの予想以上の反応に驚きながら、「構わないよ」と返事をすると、ナルトはまさに花のような笑顔で「ジン兄」と俺を呼んだ。

その響きは、思っていたよりも遥かに照れ臭かったが、ナルトが嬉しそうにしているので、まぁ、いいか、という気持ちになったのだった。

第五話（後書き）

6月6日、最後の部分を加筆修正しました。

第六話

俺は今、ナルトと一緒にラーメンを食べていた。ラーメン、とは言っても、一楽で出される様な本格的なラーメンではなく、カップ麺なのだが。

あれからナルトの部屋にお邪魔した俺は、一緒にご飯を食べよう、というナルトの言葉に甘えて、夕飯をご馳走になることにした。

「私ね、ラーメン作れるんだよ！」と、カップ麺を取り出したナルトを見て、お湯を使うのは危ないんじゃだろうかと、心配になり、「俺が作ろうか？」という言葉が喉元まで出掛かる。

だが、ラーメンを作れる、と言った時のナルトのちょっと自慢げな笑顔が脳裏を過ぎる。何から何まで世話を焼きすぎるのもあまりよくないよな、と思い直し、寸でのところでその言葉を飲み込んだ。

ナルトがカップ麺にポットのお湯を注ぐ様は、意外と手馴れているようだったが、それでもハラハラとしながらナルトを注視する俺は、さながら、幼子の初めてのお使いを見守る親の様な気持ちだった。

お湯を入れて3分が経ち、「いただきます」と揃って手を合わせてから、食べ始める。

俺はカップ麺という物に馴染みがなかったので、こんな味なんだ、手間の割りに美味しいな、などと思っていると、なにやら視線を感じ、顔を上げるとナルトと目があった。

ナルトの目は明らかに何かを期待しており、目が口ほどに物を言っていた。

その様子の可愛らしさに和みながら、「美味しいよ」と言うと、ナルトの表情がパァっと輝く。

「二人で食べると美味しいね」と、ご機嫌な様子のナルトの言葉に、自然と笑みがこぼれた。

カップ麺を食べながら、ナルトの部屋を見渡す。

部屋の中は、一見、片付いてるかの様に見えたが、実際のところは、物が少ないと表現する方が正しいように思えた。

ここで暮らし始めてあまり時間が経ってないであろうその部屋の片隅に、空になったカップ麺の容器がいくつか積まれているのを発見し、カップ麺を作る手際の理由に納得するのと同時に、ナルトの食生活が心配になった。

「ねぇ、ナルト。いつもご飯はどうしてるの？」

そう尋ねてみると、言いたい事を整理しているのか、えっとね、と少し首を傾げるような仕草をしてから、ナルトは話し始めた。

「一週間に2回、おじいちゃんと一緒に夕ご飯を食べる日があって、その時に残ったご飯も持たせてくれるの。次の日はそのご飯を食べて、なくなったら・・・ラーメン食べてる」

三食ラーメンを食べている、なんて事は流石になかった様で、少しほっとする。

三代目は忙しい仕事の合間を縫って、僅かなりともナルトの為に時間を作ってくれているらしい。やっぱり優しい人なんだな、と思う。

ラーメンを食べていると言った際に、ちょっと言い淀んでいたところを見ると、三代目にちゃんと野菜も食べるように、などと言われているのかもしれない。

だが、この年齢の子供に、自制しろなんてのはちょっと酷だろう。

ここは、ナルトの兄貴分として、俺がなんとかしなければ！と、妙な義務感に燃えて、ナルトに提案する。

「あのさ、明日のお昼、今日の夕ご飯のお礼に、お弁当作ってくるから、一緒にピクニックに行かない？」

自発的に食べてもらうのが無理なら、食べさせてしまえばいい。ピクニックという楽しい事とセットなら、きっと美味しく感じてくれるだろう。

「行きたい！・・・でも、ジン兄、お弁当って、自分で作るの？」

ナルトも乗り気のようで一安心だ。

「そうだよ。いつも自分でご飯作ってるから大丈夫。ナルトも、きっと気に入ってくれると思う」

実は、料理の腕に関しては、ちょっとした自信があるのだ。

その自信の理由には、前世での食生活が深く関わっている。

前世での俺は、体が弱く、揚げ物などの少し重い物を食べようものなら、すぐに吐いてしまうような有様で、その結果、食事の大半が栄養を摂取するための作業、という意味合いの強い、味気ない病人食で占められていた。

漫画や小説などで、美味しそうな食事の描写を読む度に、どんな味なんだろうと夢想し、自分の体を恨めしく思ったものだった。

この世界に来てから、美味しい物を食べる、という言葉の本当の意味を知った俺は、すぐにその魅力に取り憑かれた。

今のところ修行以外に趣味らしい趣味もない俺は、影分身の修行中などによく料理の勉強をしていて、今やその実力はプロ顔負け、とまでは言えないものの、それなりの腕前になっていると自負している。

「やっぱりジン兄って凄いんだね」

ナルトの向けてくる尊敬の眼差しがこそばゆい。

「なんせ、ナルトのお兄ちゃんだからね」

照れ隠しで誤魔化しながら、俺は頭の中で明日のメニューを組み立て、足りない食材を買うために、帰りに商店街へ寄って行こうと決めた。

夕食を食べ終わり、少し食休みを挟んでから、「明日の約束忘れないでね、絶対だよ！」と何度目か分からない念を押すナルトに見送られ、俺はナルトの家を後にした。

閉店間際の商店街で買った食材を抱えながら、家への帰り道を歩く。

初めて、俺の知る「未来」に深く関わった今日という日は、本当に激動の一日だった。

ナルトに出会い、一緒に遊び、兄と呼んでもらえるくらいに仲良くなれた。とても充実した、そんな一日。

しかし、「禍福は糾える縄の如し」「人間万事塞翁が馬」という先人達の言葉が示すように、何が幸せに繋がり、何が不幸に繋がるのか、なんて事を完璧に予想するのは不可能だ。

良かれと思ってやった行動で、助けたかった人を逆に不幸にしてしまったとしたら、結果的にナルトをより悲しませる事になってしまったとしたら。

深く考えると動けなくなってしまいそうで、考える事を避け続けていた「未来を知っている」という事実の重みが圧し掛かってくる。

・・・強く、なりたいな。

誰もいない夜の道で呟く。

生き残るための、誰かを倒すための、力の強さだけではなく、背負っているものから目を逸らさずに、信じた道を進めるだけの、心の強さが必要だと思った。

ふと、ナルトの笑顔を思い出す。

もし、俺が未来に関わらない事を選んでいたら、今日あの笑顔はなく、公園で最初に見た時のような寂しそうな顔のままだっただろう。

そう思うと、選んだ道はきっと間違いじゃない、俺の望む未来にきっと繋がっている、そう信じきれるような気がした。

第六話（後書き）

季節の描写を忘れるという大ポカをやらかしてしまい、本日6月6日の朝に、第五話の最後の部分の加筆修正、及び、各話の誤字脱字を含めた細かい部分に修正を入れました。修正前の記事を読んでくださった方々、申し訳ありませんでした。

第七話

早朝の台所に、肉の焼ける音が響き、香ばしい香りが立ち込める。
俺は今、ナルトとのピクニックに備えて、お弁当を作っているところだ。

今回のピクニックの一番の目的は、ナルトの食生活改善への第一歩を踏み出す事である。

昨日ナルトからそれとなく聞き出した話を総合すると、どうも野菜という食べ物自体に苦手意識があるようで、まずはそれを払拭しなければならないと思った。

ナルトの中にある、野菜＝美味しくない物、という図式を破壊すべく、今日のメニューは、野菜を多めに使いつつも、「栄養価よりも食べ易さ」というコンセプトで、甘みのある野菜を多く使ってみた。

刻んだニンジンを混ぜ込んだ卵焼きに、すり潰したジャガイモに塩・コショウで下味を付け、刻んだハム、キュウリ、ニンジンとマヨネーズで和えたポテトサラダ。

ひとくちサイズに切ったキャベツとニンジン、あらかじめ調味料をもみ込んで下味を付けておいた豚バラ肉を、少量のにんにく、しょうがと共に、ゴマ油などの各種調味料で炒めたキャベツ炒め。

メインのハンバーグには、みじん切りにしたシメジを混ぜ合わせる

事で食感にアクセントを加え、ソースもすりおろしたタマネギを使ったオニオンソースにした。

おにぎりは高菜漬けを刻み込んだ物と、普通の塩おにぎりの2種類を用意してある。俺が高菜漬けの方を食べるのを見て、ナルトも手を付けてくれる事を期待したい。

おやつとして、カボチャのパウンドケーキも作った。カボチャを柔らかくなるまで蒸してから、砂糖とバターを混ぜてペースト状にした物を、バターケーキの生地に混ぜ込んで焼き上げたものである。カボチャペーストのマーブル模様が見た目にも綺麗で、しっとりとした生地に、バターの匂いが香ばしいこのケーキを、ナルトもきっと気に入ってくれるだろう。

完成した料理は、痛まないよう、弁当箱に入れる前にしばらく冷ましておき、その間に、包丁代わりに使っていたチャクラ刀などの調理器具を洗い終える。

それが済むと、一息つく余裕の出来たので、俺は味見を兼ねた朝食を食べ始めた。

・・・うん、悪くない。そんな感想を抱きながら、朝食を片付けていく。

後片付けまで終わった頃には、料理も十分冷めていたので、弁当の盛り付けを始めた。

子供用としては大き目の2つの弁当箱に、次々とおかずを敷き詰め

て行く。ポテトサラダの下にはレタスの葉の器を敷き、プチトマトで彩を添えた。おにぎりは弁当箱とは別にアルミホイルで包む。

豪華絢爛、という感じではないが、十分美味しそうに見えるお弁当が完成した。

食べ物に水筒、ビニールシートを詰めたリュックを背負い、約束の時間より少しだけ早めに着くように家から出る。

外に出ると風が気持ち良く、綺麗な青空が広がっており、今日は絶好のピクニック日和だ。

ナルトの家の前まで行くと、そこには、既に家の外で待っていたナルトがいた。

どうやら、待ち切れなかったらしい。

「ジン兄、遅いよっ」

開口一番に、少し理不尽な文句を俺にぶつけながらも、楽しみで仕方ない、といった様子のナルトに苦笑する。

「悪い、悪い」

軽い態度で謝ってから、じゃあ行こうか、と目的地に向かって歩きだした。

今回の目的地は、ナルトと出会った近くの公園とはまた別の、少し遠くにある大きな公園だ。

ナルトの家から、木の葉の里の郊外に向かって1時間ほど歩いた先にある、その公園は、緑豊かで綺麗な場所で、きっと弁当を美味しく感じさせてくれるだろう。

軽い足取りで、早く行こうと俺の手を引くナルトは、今にも走り出さんばかりで、昨日の足のケガの影響はないようだった。

九尾の回復力のお陰なのだろう、昨日ナルトの家に着いた時点で、もう痛くないとナルトは言っていた。しかし、捻挫の類はしばらく経ってから熱を持つことも多い。それを少しだけ心配していたのだが、杞憂だったらしい。

予定していた途中休憩も必要なさそうで、少し早めに目的地に着けそうだった。

無事目的地に着いた俺達は、平日の昼間という時間帯のせいか、人のまばらな公園の中、お弁当を食べるのに良さそうな場所を探した。

しばらくして見付けた大きな木の木陰に、ビニールシートを敷いてから腰を下ろす。

リュックから2つの弁当箱とおにぎりの包み、水筒を取り出し、「

はい、これはナルトの分だよ」と、片方の弁当箱をナルトに差し出す。

おにぎりの包みを広げ、お箸の用意をしながら、期待にちょっとの不安が混じったような緊張の面持ちで、お弁当の包みを解くナルトの様子を、こちらも少し緊張しながら見守る。

蓋を開けたナルトの口から「わぁっ」と言う声が漏れ、ナルトの表情が華やいだ。

どうやら期待に応える事が出来たらしいと、安堵する。

待ちかねた様子で「食べていい？食べていい？」と、目で訴えるナルトにお箸を渡しながら、「どうぞ、召し上がれ」と言うと、「いただきます！」と、手を合わせながら早口で言って、ナルトは勢いよく食べ始めた。

「ゆっくり食べた方がいいよ」という声も、夢中になっているナルトには届かないようだ。

気に入った？なんて聞く必要はなさそうだと、案の定、喉を詰まらせたナルトに水を渡しながら、苦笑する。

人が美味しそうにご飯を食べてる様というのは、本当にいい。再び勢いよく食べ始めたナルトを見てそんな風に思いながら、俺は自分の分に手を付け始めた。

俺がお弁当を3分の2程食べ終わった頃、ナルトが何やらしゅんとした様子でこちらを見ているのに気付く。

どうしたのだろうと見てみると、ナルトの手元の弁当箱は既に空になっており、どうやら、食べ終わってしまったのが残念らしい。

そこまで気に入ってくれたのを嬉しく思い「食べる？」と聞くと、ナルトは目を輝かせてから、何度も首を縦に振った。

「今日は特別だよ」と言って弁当箱を渡し、今度はゆっくりと味わって食べてくれるナルトを見て、次はもっと沢山作ってこようと思った。

お弁当を全て食べ終え、満足気な表情になったナルトは、けぷっと可愛らしく息を吐くと、シートの上で横になった。

お腹が満たされ、眠くなってしまったらしいナルトに、俺は後片付けをしながら「少しお昼寝しようか」と声を掛ける。

「そうするー」という返事の声もかなり眠たそうで、もう既に夢うつつなのかもしれない。

片付けを済ませてから、俺もナルトの側で横になった。

目を閉じると、涼やかな風が一層気持ちよく感じられ、すぐに眠気が訪れる。

俺とナルトは、初夏の涼やかな風が吹く公園の、大きな木の下で、
穏やかな時間を満喫したのだった。

第八話

ナルトとの初めて出会った日から、早数ヶ月。夏もそろそろ終わりを迎えようとしていた。

ピクニックというシチュエーションを利用し、俺の料理に対するイメージアップに成功した俺は、あの後も、遊ぶ際にお弁当を作って行ったり、ナルトの家に夕食を作りに行ったりと、ナルトの食生活改善に向けて日々努力を続けている。

今ではナルトに「ジン兄の料理はカップラーメンと同じくらい好き」との高評価を貰っており、ナルトの食生活改善計画は順調だ。

・・・これは余談だが、その評価を聞いた時、ナルトの好物と同じくらい好きだと言ってもらえた嬉しさを感じると同時に、作る手間の差を考えるとちょっと泣きたくなった。この分だと一楽のラーメンは遥か彼方だろう。料理の道は長く険しい。

いっそ、ラーメンに勝つのは諦めて、野菜中心に出汁を取った、具沢山野菜ラーメンでも研究してみようか。なんて事を考えていたりする、今日この頃である。

ともあれ、この時期の最重要事項と位置付けていた、「ナルトと会って仲良くなる」という目標は、予想以上の成果を上げつつ、達成出来た。

これからは、そろそろ次に目を向けるべき時だろう。と、俺はよう

やく出来るようになった、家事を任せられる精度の影分身を出しつつ、今後に向けて思いを馳せる。

俺がアカデミーで果たしたい最大の目的、それは、サスケと友達になる事だ。

サスケと仲良くなりたい、なんて単純な理由も勿論あるが、うちは事件の前までに、サスケの一族への依存度を下げて、原作の、復讐だけを考えて生きる様な生き方を変える事が出来たら、という想いが一番大きい。

一族の代表だというサスケの父親と、サスケの兄であり、一族きっての天才うちはイタチ。サスケの視界は、この二人の大きな影に大半を占められている。

そこに強引に割り込むというのは、並大抵の事ではないだろう。

一番効果的な方法は、アカデミーでサスケを超える成績を叩き出す事かもしれない。

「超えるべきライバル」として認められるのではなく、「父親に認めてもらうのに邪魔な障害」として敵意を持たれる可能性もあるが、どんな形にせよ、まずは俺という存在を視界に入れてもらわなければ、話が始まらない。

敵意を持たれてしまった場合は、どうにかして、一緒に切磋琢磨し

た方が強くなれる。という方向に話を持って行き、一緒に居る間に少しずつ仲良くなれる事を期待するしかないかもしれない。

出来ればサスケと仲良くなる際に、サスケとナルトにも友達同士になって欲しいとも思うが、こればっかりは当人同士の問題だ。

俺に出来るのは、間に入ってフォローをする事くらいだろう。

アカデミーでどの程度まで力を示していいのか、という事についても考える必要がある。

千手一族秘伝の忍術書、指南書などを参考に己を鍛え続け、ついには影分身による修行が可能になった俺の実力は、今や「このまま順調に行けば、アカデミー在学中に歴代火影と並ぶ事すら可能ではないか？」と思える程の伸びを見せていた。

影分身による修行効率は異常と言っても差し支えない程で、原作でこの修行法を思い付いたカカシ先生には尊敬の念を禁じえない。二つ名を持ち、木の葉の里随一の使い手と称されるだけの事はある。生徒の前でエロ小説を読むのだけはやめて欲しいと思うが。

原作でナルトとサスケが同時に卒業していたところを見ると、今のアカデミーには戦争で消耗しきっていた頃と違って、飛び級の様な制度はないのだろう。だが、何事にも例外はある。力を見せ過ぎると、「根」に若くして所属していたサイの様に、スカウトされる、なんて可能性も考えられた。

ナルト達のすぐ側で出来る限り助けになる為には、その可能性は排

除しておきたいし、なにより、木の葉の里という組織に縛られ過ぎるのを避けたい。

下忍のまま、Dランク任務などの簡単な仕事を影分身に任せつつ、裏で好きに動く。これが将来の理想像だと、俺は思っていた。

これまで過ごしてきた里にはそれなりに愛着はあるし、力になりたいとも思っているが、俺が力になりたい人達は、里の外にもいる。組織の中で重要な役割を任されてしまえば、行動に制限も多くなり、俺の目標の妨げになる可能性が高い。

言い方は悪いかもしれないが、俺にとっては「木の葉の大勢の里人」より「俺が大事に思う少数の人達」の方が重要だった。

両方助けられるなら勿論両方助ける。だが、二者択一を迫られる事があれば、俺は間違いなく後者を選ぶ。

だが、それはとても辛い事でもある。理由があるにせよ、助けられるのに助けなかった。その罪悪感は一生付いて回る事になるだろう。

だから、少しでも、二者択一の機会を減らせるように、両方助けるという三番目の選択肢を増やせるようにと、俺は今も力を求め続けていた。

少し考えが逸れてしまったが、要は、サスケに認められるだけの力を示す必要はあるが、目立ち過ぎるのは良くない、という結論になった。

うちは一族のエリートであるサスケに勝つだけの力を示しつつ、必要以上に目立たない。

・・・これは苦労しそうだと、胸中で深く溜息をつく。

アカデミー入学までに、力を完全に隠したまま、サスケと仲良くなる方法が思い付けば良いのだけど。

そんな事を考えながら、今日も俺は修行に勤しむのだった。

第九話

「皆さん！入学おめでとう。これからは忍の道を目指す者として・・・」

よく晴れた空に、三代目の声が響き渡る。

ここ、アカデミー敷地内のグラウンドでは、本年度の入学式が執り行われていた。

きちんと整列している子供達に混ざりながら、さて、これから6年近く一緒に過ごす仲間はどんな子達だろう、と周りを見渡してみる。

もっと、新しい生活への期待と不安にざわついているかと思いきや、多くの保護者が参列しているためもあってか、殆どの子が神妙に三代目の話に耳を傾けていた。

最もナルトは、その殆どには含まれておらず、こっちを見つけて嬉しそうに手を振っているのだが。

「大事な式だから、邪魔しないように大人しくしてるんだよ」という事前の注意は、アカデミー入学の嬉しさの前に吹き飛んでしまったらしい。

今日はずっと忍者に、火影になりたいと言っていた、ナルトの夢への第一歩だ。はしゃぐのも無理はないか、と苦笑しながら小さく手

を振り返した後、前を向けというジェスチャーをする。
注意を思い出してくれたのか、ナルトはハッとした様子で慌てて前を向き、その後はソワソワとした様子ながらも大人しく話を聞いていた。

そうこうしている内に、式が終わり、クラスで軽く今後の予定の説明を受ける事となった。
ナルトと連れ立ってクラス分けを確かめに掲示板へ向かうと、そこは既に人でごった返していた。
今年の新入生は91名。それを3つのクラスに分けてある。
女子は、くの一クラスとして一まとめにされており、そこに組み込まれているナルトとは、当然別クラスだ。
それを知らなかったらしいナルトは「一緒のクラスになれるかと思ったのに」と少し不貞腐れていた。
ナルトを宥めながら、表を確認して行くと、俺の名前はすぐに見つかった。
サスケの名前も同じクラスの欄にあり、ほっとする。
もし、違うクラスになってしまった場合、俺をサスケにライバル視してもらうためには、はっきりと優劣が分かるほどの、高い成績を取らざるを得ない。

互いの実力を把握しやすい同じクラスなら、調整も多少楽になるだろう。単純に接する機会が多いという利点もある。

他にも、同じクラスにはシカマル、チョウジがおり、隣のクラスにはキバとシノ、くの一クラスにはサクラ、いの、ヒナタの名前もあった。どうやら、俺の知識と大きな差はないようだ。

教室に行くと、サスケはすぐに見つかった。

うちはの家紋を模った刺繍が施された黒いシャツを着て、何か考え込む様な表情で座っている。

声を掛けてみようかとも考えたが、すぐに担任が来るだろうし、今話し掛けても「うざったい奴だ」という印象しか残らないかも知れない、と思い直してやめておく。

サスケの様子を少し心配に思いながら席に座ると、隣の子から声を掛けられた。どうやら友達などが同じクラスにおらず、不安だったらしい。

少しの間その子と雑談をしていると、教室の扉が開き、担任であろう、少し丸みを帯びた顔にあご髭をたくわえた、豪快そうな印象の教師が入って来た。

大きな声で一声掛けて皆を落ち着かせた先生は、簡潔な自己紹介をした後、カリキュラムについての説明を始めた。

簡単な説明だけだった先生の話は１０分程度で終わり、今日はそれで解散となった。

父親を伴い担任となにやら話しているサスケの横を通り過ぎ、一緒に帰る約束をしているナルトの姿を探す。

遠めにも目立つ金色の髪はすぐに見つかり、声を掛けようと近付いて行く。

他の子達が親といるのを所在無さ気に見ていたナルトも、こちらに気付いたようで、表情を一変させると、嬉しそうにこちらに駆け寄ってきた。

「お待たせ、ナルト」

そう声を掛けると、ナルトはそんな事ない、という風に首を振った。

「帰ってご飯食べよっ。そんで、食べたら特訓するの！」

「なんの特訓？」

「手裏剣とか、忍術とか、んーと、色々！」

明日からの授業が楽しみで、居ても立ってもいられない様だ。

「じゃあ今日はパスタでも茹でようか」

この様子だと食べてすぐ動こうとするだろうし、消化に良いスープ

パスタにしようかな。コンソメスープは前に作って冷凍してあるのが残ってるし、ホールトマトの缶詰なんかもあった筈だ。

そんな事を考えていると、ナルトは中々動かない俺に焦れてしまったらしい。

「それじゃ、早く帰ろうよ！」

そう言って俺の手を引くナルトに連れられ、俺達はナルトの家に向かった。

ナルトの家で昼食を食べた後、特訓をする為に近くの雑木林へ移動し、ナルトの特訓風景を眺める。

実はこれまでも、俺とナルトは度々、こんな風に忍者になるための練習をしていた。

それは遊びに近いレベルの物だったが、その結果、分かった事がある。

ナルトは本来なら、決してアカデミーで「ドベ」なんて蔑まれるような存在じゃない。という事だ。

確かに不器用ではあるかも知れないが、この年齢の子供としては飛び抜けている、と言ってもいい程の体力とチャクラの量を持っている。

体力やチャクラの量が多いという事。それは、試行回数を増やせる

という事だ。

試行回数が増えれば、どこが悪いのかを知る機会が増え、それを修正する機会も増える。これは素晴らしい才能だと言える。

そんな才能を持つナルトが、原作で「ドベ」なんてレッテルを貼られていたのは、独学でやっていたが為に、その利点を上手く活かせなかったからだろう。

意地っ張りで、つい見栄を張ってしまう事の多いナルトは、教科書などを参考にしようにも、理解出来ない箇所を素直に他人に尋ねる事が出来ず、恐らくは、自分のどこが悪いのかわからないまま、ひたすらに数をこなすしかなかったに違いない。

それでは、努力に見合った成果が出ないのも、仕方ない事だと言えた。

努力の仕方が悪いから成功しない。成功しないから自分には才能が無いと思い込む。才能が無いと思い込んでるから、それを他人に知られたくなくて他人に聞けない。他人に聞けないから、努力の仕方が悪いまま。ナルトはこんな悪循環に陥っていたのだと思う。

原作でのナルトは、カカシ先生に師事した途端に、素晴らしい伸びを見せた。

俺が教えても、カカシ先生や自来也仙人が教える程ではないにしろ、ある程度の効果は期待出来るだろう。

「ドベ」なんて呼ばれるような事がなければ、今のナルトはところ構わず迷惑を掛けて回るような事はしてはいない。親に与えられた先入観を払拭し、皆と仲良く出来る可能性は十分ある。

生来の物なのか悪戯好きな面はまだあるが、俺や三代目など、親しい一部の人へのコミュニケーション的な意味合いでやっている今の悪戯なら、そう問題にはならないだろう。

ただ、問題が一つ残っていた。

それは、ナルトの忍術を鍛えてしまっていいのか、という問題だ。

中途半端に忍術が上達し、アカデミー卒業試験にあっさり合格、なんて事になると、ナルトが影分身を習得する機会を失ってしまう。それはナルトの今後を考えると絶対に避けなければならない。

禁術という扱いである以上、俺が教える事も、俺が使えるのを知られる事も不味い。

やはり、忍術に関しては「忍術は感覚的な物が大きいから、俺には教えられない」と押し通し、その上で、他を徹底的に鍛えるしかないだろう。

強大なチャクラを持つナルトが、そのコントロールに苦戦するのは当然でもあるので、そう不自然な言い訳でもあるまい。

忍術の比重が大きいアカデミーで、忍術以外で皆に一目置かせる程にナルトを鍛える。

これもまた難題だな、と考え込んでいると、

「もー、ジン兄、また何か考え事してる。ダメだよ！今は特訓の時間なんだから、ちゃんとやらなきゃ」

いつのまにかナルトが手を止めて、こちらを見ていた。

「ゴメン。・・・どうやったら、ナルトに上手く手裏剣術教えられるかな、と思ってさ」

これは半分本当。

「ホントっ？手裏剣教えてくれるの！？」

「今までは危ないからダメって言ってたけど、ナルトはもうアカデミー生だからね」

サスケなんかはアカデミーに入る前も相当練習していた様だったし、今までが少し過保護過ぎたのかもしれない。

「早く教えて」と、はしゃぐナルトの嬉しそうな様子を見て、もっと早く決断すべきだったかなと反省する。

「じゃあ、まずは手裏剣の持ち方から・・・」

俺とナルトがアカデミー生になったその日、ナルトが疲れ果てて眠ってしまう直前まで、雑木林には手裏剣の音が響いていた。

第十話

アカデミーに入学してから、そろそろ半年が経とうとしている。

ナルトの体術関連の能力向上、サスケに俺を意識させる、という2つの試みの成果は、明暗がくっきりと分かれてしまっていた。

ナルトは、やはり飲み込みが良いとは言えないが、それを補う豊富な練習量によって、その努力の成果はナルトの中で確実に芽吹き始めている。このまま順調に行けば、実を結ぶのもそう遠い事ではないだろう。

一方、サスケとの関係は、無関心だった当初よりは進展はしているものの、複雑なものとなってしまった。

サスケと同等以上の結果を出す事によって、俺を意識させるという目論見自体は成功している。だが、以前懸念した通り「父親に認められるのに邪魔な障害」と思われてしまったのか、お世辞にも良好な関係を築けているとは言えない状態だ。

何度かサスケに接触を試みたのだが、プライドの高いサスケは、俺を意識している事自体を認めたくないのか、あからさまに「お前なんてどうでもいい」という態度を取られてしまった。それでいて、実技の時などは明らかにこちらを意識しているのだから、本当にややこしい。

アカデミーでのサスケは、友達を作ろうともせずに、休み時間ですら一人で手裏剣術などの修行をしている。前日にはなかった絆創膏

を貼って登校してくる事も多く、家に帰ってからもハードな修行をしている事が窺えた。

そんな風に修行に明け暮れているサスケは、クラスメイトに笑顔を見せる事もほとんどない。そんなサスケの、常に眉根を寄せている様な表情を変えたいと願うも、中々具体的な方法が思い付かない。

ここまでの授業で、俺とサスケは互いにほぼ満点の結果を残しており、明確な差が付いてないのも、サスケが俺を認めない一因なのかもしれない。そう考えた俺は、焦って無理に関係を改善しようとせずに、サスケに実力を示す機会を待つ事にした。

そうやってもどかしい日々を過ごしていた俺に、ついにその機会が訪れる。

上期の授業の総決算と位置付けられた、3クラス合同で行う、3人1組チーム戦形式のサバイバル演習で、サスケのいるチームと対戦する事になったのだ。

演習場になっている校外の森で行われる、この演習のルールは単純で、相対する2組に巻物が一本ずつ与えられ、制限時間内に相手から奪う事が出来れば勝ちとなる。

手裏剣やクナイの使用は危険だからという理由で禁止とされているので、実際に使える忍具はロープや煙玉、光玉くらいだ。決着は、ほぼ確実に取っ組み合いになるだろう。

俺のチームメイトはチョウジとヒナタ。

サスケのチームメイトは面識のない他のクラスの二名で、残念ながら前情報は得られなかった。

俺とチョウジはクラスメイトなので既に互いを見知っているが、ヒナタと顔を合わせるのは初めてなので、準備のために与えられた時間を利用し、互いに自己紹介をする。

「俺は狭間ジンって言うんだ。よろしくね」

「ボクはチョウジ。秋道一族の秋道チョウジ」

「わ・・・私、日向ヒナタ・・・。よろしく・・・」

チョウジはいつも通りだったが、ヒナタは初対面二人がチームメイト、という事で少し緊張しているようだ。

チョウジは穏やかな子だし、きっとヒナタもすぐ慣れてくれるだろう、と思いながら、互いの得意な事、不得意な事を教えあう。

それが一通り済んでから、俺は作戦について切り出した。

「1つ作戦を立ててみたんだけど、聞いてくれるかな？」

「作戦？相手を探して巻物を取るだけじゃないの？」

チョウジの言葉通り、確かにそれでも勝てる可能性は高い。サスケは多分作戦なんてなくても勝てると考えて、普通に突っ込んでくる

だろう。

だが、出来ればサスケにはこれを機に、仲間と協力する事の大切さを知って欲しい、とも思っていた。

「それでもいいんだけどね。作戦があった方が、勝てる確率も上がると思って」

二人が頷いてくれたのを確認してから、話を続ける。

「相手のチームに、うちは一族のサスケが居るのは知ってるよね？あいつは凄いやつなんだけど、その分、自分一人で全部やっちゃおうとする癖がある。だから作戦って言うのは、その癖を利用して相手チームからサスケだけを引き離す作戦なんだ」

早口にならないように気を付けながら、実際の内容の説明に入る。

「簡単に流れを説明するね。まず最初に、俺が巻物を持って、相手チームの前に姿を見せてからすぐ逃げる。サスケは足が速いから、他の2人との間に距離が出来るだろう。でも多分サスケは、一人でやれると思って、味方が追いつくのを待たない」

原作の下忍になるための試験時、サスケは3人1組を足手まといが増えるだけだと考えていた。

「そこで、隠れて待ち伏せしていたヒナタが、サスケと残りの二人の間に煙玉を投げて、敵にサスケと俺を見失わせる。その間に、チョウジが待っている場所にサスケを誘き寄せて、2対1の状況を作ってサスケと戦う」

少し間を置いて、頭の中で作戦をシュミレートしているらしい二人を待つ。

「ボクは待ってるだけでいいんだ？」

「チョウジは足はあんまり早くないけど、力があるからね。そっちの方が長所を活かせると思う」

なるほど、と頷くチョウジ。

一方のヒナタは、自分が役割を果たせるか不安に思っているが、それを口に出せずにいる様だ。

「大丈夫だよ。もし、作戦が失敗してサスケ達が3人一緒に来ちゃったとしても、その場合はヒナタも合流すればいい。そしたら最初の予定通りに3対3に戻るだけ。失敗したからといって、すぐ負けが決まるわけじゃない」

だから緊張しなくてもいいんだよ。と笑いかけると、少しは不安が解消されたのか、ヒナタはぎこちないながらも、笑みを返してくれた。

「じゃあ、ここからは少し細かい話をするね」

先生から支給されたこの演習場の地図を広げてから、チョウジとヒナタがそれぞれ隠れる具体的な場所の指示や、作戦が失敗して、合流する事になった時の合図などを確認していく。

そうこうしているうちに演習の開始時間が迫り、俺達は開始地点に移動した。

開始を告げる教師用の笛の音が森に鳴り響く。

「それじゃ、作戦開始だ」

俺達はそれぞれの役目を果たすべく、走り出した。

第十一話

薄暗い森の中、勝利条件の巻物をこれ見よがしに腰のベルトに結びつけ、俺は木々の間を駆け抜けていた。

そろそろ相手との遭遇予定地点が近付いている。ここからは敵と遭遇する事も想定した動きをしなければならない。

実のところ、ある程度近付いた時点で、相手の位置は把握出来ていたので、本来ならばそれほど慎重に動く必要はなかった。

だが、他のアカデミー生で同じ事が出来るのは、恐らく犬並みの嗅覚を持つキバくらいだろう。それを考えると、早く遭遇しすぎるわけにもいかない。

採点と安全面を考慮してだろう、生徒に気付かれないよう監視をしている先生の存在も確認している。軽率な行動は慎まねばならなかった。

サスケ達は3人固まって、うちのチームの開始地点に向かって一直線に進んできている。

不自然でない程度に気配を消しながら、サスケ達が視認出来る位置まで近付く。

先頭を歩くサスケの堂々とした様子に比べて、他の二人はキョロキ

ョロと周りを警戒しながら、少し不安そうな足取りでこちらに向かってきていた。

サスケが他の二人に全く注意を払ってないところを見ると、やはり巻物はサスケが持っているのだろう。

チームメイトを足手まといとしか見ていないサスケが、他人に巻物を任せる可能性は低いと思っていたが、どうやら予想通りの様だ。

サスケにとっても自分の実力を証明する貴重な機会。全力で勝ちに来てくれているらしい。

改めて気を引き締め、一つ深呼吸をして自分を落ち着かせてから、俺は作戦を開始した。

接近する俺の存在に真っ先に気が付いたのは、やはりサスケだった。

この薄暗い森で、まだかなりの距離があるにも関わらず、俺の姿に気付いたサスケは、「獲物を見付けた」と言わんばかりの笑みを浮かべて、こちらへ向かって走りだす。

突然のサスケの行動に驚いている残りの二人はまだ動けない。しかし、それに構う事なく、サスケはどんどん俺との距離を詰めてくる。

予想以上に距離を稼げそうだな。と胸中で呟きながら、俺は「偵察をしていたら不意に敵に見つかった」という態度を装って後退を始めた。

開始地点に向かって一直線に逃げながら、サスケに俺との距離を徐々に詰めさせる。そろそろヒナタが隠れている目標地点だ。

俺の逃げる先にヒナタ達がいる可能性が高い事は、サスケも分かっている筈だが、合流前に捕まえれば問題ないという事なのか、それとも一人で十分だと思っているのか、追撃の手を緩める気配はない。

視界の端の木の上にヒナタの姿を確認する。あちらも既に俺に気付いているようだ。白眼の持つ前兆なのか、事前に確認したヒナタの視力は、サスケに負けず劣らず素晴らしいものだった。

サスケにヒナタの存在を気付かれる恐れがあるため、俺が作戦実行のタイミングを指示するわけにはいかなかった。

サスケが俺を無視してヒナタに向かう可能性は低いが、罠があると悟られるのは不味い。

ここでの作戦の成否は、最初からヒナタの視力と判断に全てを委ねてある。

作戦実行の予定地点に辿り着き、俺はサスケとの距離を測る振りをして、背後を確認する。

すると、これ以上無いと思えるタイミングで、横手から煙玉が飛んでくるのが見え、俺は心の中で喝采を上げた。

煙が出るのを確認し、俺は即座にチョウジがいる方向へと進路をずらす。

今は突然の事に戸惑っているであろう、サスケチームの二人が冷静になる前に、出来る限りサスケを引き離さなければならない。

二人の動向については、ヒナタに隠れていた場所から一旦離脱した後、距離を取って監視する事になっている。何かイレギュラーが起きれば知らせてくれる筈だ。

チョウジが隠れている場所まであと僅かになったところで、俺は足を止めてサスケと向き合う。

「どうした、鬼ごっこはもう終わりか？」

少し息を切らせたサスケが、いつでも飛び掛れるように低い姿勢を取りながら、俺に問いかけた。

「そうだね。もう十分、サスケと他の二人を引き離せたみたいだし」

視界の悪さに加え、音で合図するのも敵に位置を知られる危険性を伴う。事前の打ち合わせでもなければ、仲間と安全に合流するのは難しいだろう。

余裕のある態度を崩さない俺を見て、サスケは僅かに眉をひそめた後、納得した様な表情になった。

「互いに足手まといなしで、オレと戦いたかったって事か・・・」

望むところだ。とサスケは俺に向かって突進してくる。

「そうじゃないよ。俺はただ、勝つ確率が高い方法を選んだだけ」
サスケの攻撃をいなしながら、わざと誤解を与えるように挑発的な言葉をぶつける。
それを聞いて、サスケの表情が怒りに染まった。
「3対3より、俺との1対1の方が楽だと思ってんのか！？馬鹿にしやがって！」
さらに勢いを増すサスケの攻勢を受けながら、徐々にチョウジの隠れている方へサスケを誘導する。
「俺はサスケを馬鹿になんてしてないよ。だって――」
俺に集中するあまり、周りが見えていないサスケの背後からチョウジが現れ、そのまま飛び掛る。
直前でそれに気付いたサスケは、驚愕の表情を浮かべながらも、どうにかチョウジの手をかわした。
流石はサスケと言うべき反応だったが、隙が出来るのを防ぐ事までは出来ない。
「――1対1じゃ、ないからね」
チョウジを避けた事によって体制を崩しかけているサスケに対し、追い討ちの足払いを掛けて完全に転ばせ、そこをチョウジが押さえ込む。

２対１。その上、怪力を持つチョウジに押さえ込まれているこの状況を覆すのは、いくらサスケといえども不可能だった。

その後、納得のいかない様子のサスケから巻物を奪い、チョウジと勝利を喜んでいると、隠れて監視していた先生が姿を見せた。

演習の終了を告げる笛が森に響き渡る。

チーム全員がそれぞれの力を発揮した作戦は見事成功し、演習は俺たちの勝利に終わったのだった。

第十二話

演習での俺達の出番は終わったが、比較的早い順番だったため、まだ多数の組が演習を行っていた。

終了するまでは所定の場所で待機となっているが、特にやらなければならない事も無いので、実質的には自由時間のようなものだ。

「ジ・・・ジンくん・・・・」

取りあえず待機場所に戻ろう、と歩いていた俺に、背後から声が掛かる。

「あ、ヒナタ。お疲れ様」

振り向くと、そこにはヒナタの姿があった。

ちなみにチョウジは、お腹が空いたと言って、既に一足先に待機場所へと戻っている。

「・・・ジンくんも、お疲れ様・・・。す、凄いね、あのサスケくんに勝つなんて・・・」

あのサスケ？

ああ、そういえば、原作だとサスケは、くの一クラスの人気ナンバ

ーワンとか書かれてような気がする。うちは一族のエリートって事で、入学当初からクラスでも話題になってたし、そういう扱いでもおかしくはないか。

でも、そういう扱いが、サスケの重圧をさらに重い物にしている気がする。周りに悪気なんてないだろうに、難しいものだ。

サスケは凄い。それは間違いない事なのに、背負う物が重過ぎて、正当な評価を得られてない部分がある。俺がどうにか出来るといいのだけど。

「チョウジが頑張ってくれたからね。それを言ったらヒナタが一番凄かったよ。なんせ、一人で二人を止めたんだから」

待機場所に向かいながら話をする。ヒナタは俺の横に並ぶ事はせずに、少し後ろからおずおずと付いて来た。

「・・・そんな、私なんか・・・。ジンくんが立てた作戦が良かったんじゃ・・・」

少しうつむいて、俺と視線を合わせようとしないヒナタが、小さな声で答える。

恐らく、これは謙遜ではなく、自分に自信が持てない事から出た言葉だろう。

「それは違うよ、ヒナタ」

足を止め、ヒナタに向き直ってから、諭すように言う。

「あの作戦は穴だらけで、成功するかどうかなんて、やってみなければわからなかった。それが上手くいったのは、運が良かったのもあるけど、一番の理由は俺達が三人とも頑張ったからだ。だから今は、素直に喜ぶべきだし、胸を張るべきなんじゃないかな」

急造チームの上に、とても緻密とは言えない作戦。それが成功したのは、紛れも無く全員の力だ。

こんな言葉だけで、ヒナタが自信を持てるようになるとは思わない。だが、いざ彼女が勇気を出そうとする時に、少しくらい背中を押す言葉になれば、と思った。

「俺が、勝ったんじゃないよ。勝ったのは、俺達だ。あのサスケのいるチームにね」

ヒナタの言葉を引用し、「あのサスケ」という部分を強調して、冗談っぽく言うと、ようやくヒナタは少し笑ってくれた。

「ジンくんは・・・、私でも・・・頑張れば、なりたい自分になれると思う？」

もう少し自信を持ってもいいんじゃないかと言った俺に、表情を再び少し不安そうなものに変えて、ヒナタが問う。

その言葉に真剣味を感じ、俺も真剣に答えを探す。

「・・・ごめん。俺には、わからない、としか言えない」

きっとなれる。なんて耳障りの良い言葉を言うのは簡単だ。しかしその言葉は、同時にとても無責任な言葉でもある。

その言葉を信じて頑張って、それでも駄目だった時に、ヒナタはさらに自信を失ってしまうかもしれない。そう考えると、俺にはその言葉を口に出す事は出来なかった。

俺の言葉を聞いて、またうつむいてしまったヒナタに、言葉を続ける。

「でも、わからなくても、それでも、頑張ってみればいいんじゃないかな」

え？っという風に、疑問符を浮かべながらも、ヒナタが顔を上げた。

「頑張ってみて、それで、もし駄目だったとしても、きっとその努力には価値があると思う」

どういう意味？と表情で問うヒナタに、少し長い話になっちゃうけど、と前置きをしてから、話を始める。

「例えば、火影になりたいと頑張っている人がいるとする」

火影はこの里の象徴だ。大半の子供達は、一度くらい火影を夢見る事があるだろう。

「でも火影になりたい人は他にも沢山居て、なれるのはほんの一握りの人だ」

多くの人の夢だという事は、それに比例して、その夢を諦める人が

多いという事でもある。

「頑張って、頑張って、それでも火影になれなかった人の努力の事を、ヒナタは、そんな努力に価値なんて無かったって思ったりする？」

ヒナタは首を横に振った。

「でしょ？俺もそうは思わない。火影になりたいという目標と、自分を変えたいという目標。他人から見れば、その大きさは違うかもしれない。でもね、ヒナタにとってそれが一番の目標なら、それはヒナタにとっては、火影になるのと同じくらい大きな目標だ。それを叶えるために頑張ったなら、その努力にはきっと価値があるよ」

本当にそうなのだろうか？と迷っている様子のヒナタに対し、さらに言葉を続ける。

「頑張ったって、火影には、理想の自分には、なれないかもしれない。でも、頑張った自分は、何もしなかった自分よりきっと理想の自分に近付いてる。理想の自分じゃなきゃ意味なんか無い、と思う人もいるかも知れない。だけど俺は、それだけで十分に価値がある事だと考えているんだ。だから、ヒナタも、その価値を信じてみない？」

考え込んでしまったヒナタを、何も言わずにしばらく見守る。

「・・・頑張ってみる。・・・ありがとう」

顔を上げた時のヒナタは、完全に吹っ切れたという様子ではなかったが、表情は幾分か明るくなっていた。

俺にも少しは前向きになるための手助けが出来たかもしれない。そう思うと嬉しかった。

先程より和らいだ雰囲気の中、ヒナタが口を開く。

「ジンくんは凄いね・・・。私と同じ年なのに色んな事考えてて・・・」

実は同じ年じゃないんだ。とは言えないので、話題を逸らそうとナルトの話をする。

「大きな目標に向かって、本気で頑張ってる子が身近にいるから、それでなのかも。ナルトって知ってるよね？ヒナタと同じクラスの。あいつはね、忍術が本当に苦手で、全然出来ないんだ。だけど、それでも火影になりたいって、本気で思ってて、ずっとそのために頑張ってる」

騒がしいかもしれないけど、根は良い子なんだよ。と言うと、騒がしい、という部分に心当たりがあったのだろう、苦笑いを返された。

「ナルトと俺はアカデミーに入る前から友達で、兄妹みたいなものなんだ。あいつはアカデミーに入って、自分が忍術を苦手だと知ってからも、目標を変える事も、努力を止める事もしなかった。そんなナルトを見てると、俺も頑張ろうって気持ちになれるんだ」

ナルトの事を話す時、饒舌になっている自分を自覚する。これは気を付けなければ、親バカというものになってしまうかもしれない。

手遅れになる前に少し自重せねば。

ヒナタの反応を見る限り、まだヒナタはナルトの事をよく知らないみたいだ。アカデミーに入ってまだ半年だし、今のナルトは悪戯ばかりしてるわけでもないから、当然といえば当然なのかもしれない。

「きっと、ヒナタもナルトとは良い友達になれると思うよ。今度、三人で一緒に遊んでみない？」

俺の提案を聞いて、ヒナタは虚を突かれた様な表情になった。

「・・・わ、私と？・・・・いいのかな？」

早急すぎるかな、とも思ったけど、ヒナタも嫌というわけではなさそうだ。

「俺はヒナタと友達になりたいと思ってるし、ナルトもきっと喜ぶよ。ナルトと一緒に居ると、いつのまにか、修行に付き合わされるのが難点だけどね」

最後は苦笑しながら言うと、戸惑っていたヒナタも笑顔になる。

「じゃあ、そろそろ戻ろうか。チョウジも心配してるかもしれないし」

そう言って歩き出す。

ヒナタはまだ横に並んではくれなかったが、最初の時よりも互いの距離が縮まっている気がした。

待機場所に戻った後は、チョウジも交えて、三人で今日の演習に感想なんかを話し合う。

話していたのは主に俺とチョウジで、ヒナタはほとんど聞き役に徹していたが、それでも俺にはヒナタが楽しそうに見えた。

第十三話

「・・・オイ、ジン」

サスケ達と戦ったサバイバル演習の翌日。授業が終わるや否やサスケが声を掛けてきた。

サスケが他人に声を掛けるという珍しい光景に、少し周りがざわめき始める。

「サスケの方から声を掛けてくれるなんて珍しいね。何か用かな？」

十中八九、勝負しろって用件だろう。何かしらのアクションはあると思っていたし、なにもなかったら困ると考えていたので、さほど驚きはしなかった。

「ああ。ついて来い」

サスケの表情は硬い。多分、俺の事が嫌いというわけではなく、単に負けず嫌いな性格が出てしまってるんだろう。

サスケは自分より強いと思った人間に対しライバル心を剥き出しにする事はあっても、それを理由に人を嫌ったりするような性格ではないと俺は思っている。

「丁度良い。俺もサスケに話があったんだ。すぐ準備するからちょっと待ってて」

わざと軽い口調を使い、周囲に険悪な雰囲気ではない事を示す。サ

スケと俺が喧嘩する、なんて話になって先生に伝わったりすると面倒だ。

俺がこの調子なら、元よりぶっきらぼうなところのあるサスケの口調が固かったところで、大事になることはないだろう。

手早く準備を済ませ、サスケと連れ立って移動する。

アカデミーの授業でも使う事のある演習場へ向かい、その片隅にある人気がない広場まで来たところでサスケは足を止めた。

「サスケの用の前に、俺の話から先に済ませてもいいかな？」

お互いに向き直ったところで俺が尋ねると、サスケは頷いてくれた。

「俺の話っていうのは、サスケに謝りたかったんだ。昨日の演習の事で」

訝しげな表情になるサスケ。

「演習の途中でサスケを怒らせるような事言ったよね？あの時、わざと怒らせるような言い方をしたんだ。チョウジの事を気付かれないように俺に意識を集中させようと思って。チーム戦で勝つために必要な事だったから後悔はしてない。けど、サスケに不愉快な思いをさせたのも事実だから謝りたくて」

俺は深く頭を下げて、謝罪の言葉を口にする。

「本当にサスケを馬鹿にするつもりなんてなかったんだ。・・・ごめん」

サスケは意外そうな顔をしていたが、すぐさま表情を真剣なものに変えた。

「お前らの策に嵌りチーム戦に負けたのは確かだ。それはもういい。だが、オレ個人がお前に負けたとは思ってない。・・・だから、ジン。今からオレと戦え」

そう告げるサスケに対し、俺も顔を上げサスケを見据えてからそれに応える。

「望むところだよ。俺もあれでサスケに勝ったなんて思ってないしね」

俺の言葉を聞いてすぐさま構えを取ろうとしたサスケを制し、ルールを確認する。

「ルールは相手が負けを宣言するか、十秒起き上がれなかったら勝ち。クナイと手裏剣の使用は禁止。治らない怪我はさせない。こんな感じでいい？」

「いいぜ」

「もうひとつ、負けた方は勝った方の言う事を一つ聞く、なんてのはどうかな。サスケも手を抜いたから負けたとか言われたりしたら嫌でしょ？」

「自信満々だな。後悔するなよ？」

「しないさ。これでもサスケに勝てるつもりでいるしね」

互いに笑みを浮かべ、対峙する。

「じゃあ、始めようか」

その言葉を合図に戦いが始まった。

サスケはおそらく短期決戦を仕掛けてくるだろう。演習での俺の動きを見て互いの実力をほぼ五分だと認識しているだろうし、性格的に考えても確実に勝つために長期戦を選択などと考えるようなタイプではない。

予想通りサスケは間合いを取って様子を見る事はしなかった。先手必勝と言わんばかりに開始早々に距離を詰めると、鋭い踏み込みから突きを放ってくる。

ガードした腕が痺れるの堪えて俺も蹴りを打つが、それはサスケにあっさりと避けられた。

サスケは目がいい。

攻撃の直後に打たれた蹴りを受け止める事もなくあっさりとかわした事実は、いかにサスケが素晴らしい目と反射神経を持っているかを物語っている。普通にやって攻撃を当てるのは難しいかもしれない。

見えていようがいまいが関係ない程の速度で攻撃するという手段もあるが、後々の事を考えるとそれは避けたかった。サスケには目が良さが弱点にもなりえる事を知ってもらうとしよう。

俺が僅かに左足に体重を掛けた。ただそれだけの行動で、俺の攻撃を察知したサスケは反射的に左へと回避行動を取ろうする。

それを予測していた俺が素早く右足に体重を移し、サスケが回避としたところを迎え撃つような形で左の蹴りを放つと、サスケは避ける事が出来ずに吹き飛ばされた。

サスケは所謂フェイントに弱い。目が良すぎるためにそれに頼りがちになり、僅かな動きも見逃さないが故に簡単なフェイントに引っ掛かってしまう。

すぐに立ち上がったサスケだったが、若干足元がふらついていた。

回避行動に間に合わせるように放った体重を乗せきれてない蹴りだったが、それでも正面衝突したようなものだ。ダメージが軽いという事はないだろう。

そこから先は一方的と言ってもいい展開になった。

なんとか攻勢に転じようとしたサスケだったが、ダメージの影響は隠し切れず徐々に主導権は俺に移り、ついには倒れる事となる。

俺も攻撃を受けた箇所を赤く腫らし、まったくの無傷というわけにはいかなかったが、戦いは俺の勝利で終わった。

気を失ったサスケを介抱するべく水道へ向かう。
水で濡れたタオルを持って俺が元の場所に戻った時には、サスケは既に目を覚ましていた。
「・・・オレは、負けたのか」
呟くようにサスケが言う。
「そうだね。今日のところは、俺の勝ちだ」
「何故オレはお前の攻撃を避けられなかった？見切れない速さではなかった筈だ」
「それはね。サスケの目が良すぎたからだよ」
「目が良すぎた？」
「うん。サスケは目が良くて反射神経も凄い。相手の僅かな動きだけで攻撃を予測して、反射的に避けれるくらいにね。だから、そこを利用させてもらったんだ。サスケくらいに目も反射神経も良い相手以外には使えないフェイントだけど、その分サスケには良く効いたみたいだ」
そうか、それで・・・などとサスケは呟いている。
「サスケくらいスピードがあるなら、相手が攻撃を確認してから避

けるなり受け止めるなりしても良いと思うよ。すぐに攻撃するのは難しくなるかもしれないけど、相手がこういうフェイントを使って来ないのを確認してから、もしくはフェイントが通用しないと思わせてからでも、攻めに出るのは遅くないんじゃないかな」

結局は読み合い。堂々巡りになっちゃうんだけどね。と付け加える。

サスケは今日の戦いを思い返し、色々と考えていた様子だったが、不意にこちらを向いた。

「まあいい。今日のところは負けだ。それで、勝ったお前はオレに一体何をさせようっていうんだ」

どうやら、賭けの事を思い出したらしい。

「勝った時に言う言葉は最初から決めてあったんだ」

何を言われるのかと身構えるサスケに向かって、俺はゆっくりと告げる。

「サスケ。俺と・・・友達になってくれないかな」

「・・・は？」

俺の言葉を聞いたサスケはまさに呆然と言った反応をしたのだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7610l/

ハッピーエンドの条件は？

2010年10月9日13時53分発行